

研究ノート

日韓併合期・日本人は何を考えていたか⑤（連載最終回）

鄭 大均（東京都立大学名誉教授）

第四章 安倍能成の朝鮮発見

春の賛歌

隣国の韓国・朝鮮は日本人にとって長い間、肯定的な関心を持ちにくい国であった。それはもう一つの隣国である中国に比べてみると分かりやすい。中国に対しては漢字や仏教がその地から伝えられたという文化的恩人のイメージがあり、また杜甫や李白や孔子というように、彼の国への敬意や憧憬や関心を駆り立ててくれる作品世界があったが、朝鮮にはそれが欠けていたのである。

とはいえ、隣国であるということは歴史的、文化的、体験的に結びつけられた緊密な関係があることを示唆する。したがって、この時代に朝鮮で生活をした日本人のなかには、その日々の生活体験や観察を通して彼我の関係を眺め直すという体験をしたものがいたはずであり、本章ではそうした日本人の体験を安倍能成（京城帝大教授）の朝鮮エッセイに垣間見ることにしたい。

街路の両側の小溝から溢れたままに凍りついたどす黒い汚水が、じくじくと解けて動き始めると共に、この朝鮮の都にも春の来たことが感ぜられる。冬の間、黒褐色に乾いて街頭の乞食僧のように塵をあびて立っていた柏檜の葉も、どことなしに緑の沢を帯びて来る。やがて南山の木の間、岩間を下る小さな谷川の水も解けて来ると、柳の芽がほのかな青みを見せるか見せない内に、京城の女は待ちかねたようにはや洗濯に出かけるのである。彼女等はそこいらの石を寄せ集めて、その上に石油缶を載せ、その下に枯枝を燃やして、彼らの持ってきた洗濯物を煮、それを棒でたたき、まだ冷たい谷川の水でゆすぎ、そうしてそこいらの花崗岩の上に乾し、その間には女子供までも引具して来た一家の食事をし、やっと日暮近くになって、洗濯物を山盛りに積み上げた木の鉢や浅い籠のようなものを頭に載いて、めいめいの家路に急ぐのである。冬中狭苦しい温突の中におしこめられていた朝鮮の人々の活動は、まず彼女らのこの洗濯から始まるように思われる。

実際朝鮮の冬は乾いて殺風景である。私は幸いに健康であるし、部屋にはストーブがあり、出る時は厚い外套を欠かないために、朝鮮の冬を別に苦しいとは思わないが、しかし概して暖かい国に育った内地人が、この冬を暮しあぐむのにも同情は出来る。温突やストーブの煙が鈍く街頭に低迷して、空は鏡の如く晴れても窓硝子は曇り、緑

は乏しく、大地は凍てついた京城の冬はわびしくなくはない。雪国の人が春が来て久しぶりに土を覗くという歓喜は、雪の少ない京城には見難いが、しかし冬中雪解けもぬかるみも殆ど見ない京城では、久しくカンカンにしみていた道の土がゆるんで、しつとりと湿いを帯びて来るのを見ると、今まで硬化していた感情がにわかになごんで来るような喜びは確かに感ぜられる。

旧正月の元日はほぼ紀元節ごろであるが、その時分はまだ冬の季節を脱し切っていない。年の末が迫ってからは殊に、近郊から薪や松葉を積んだ牛を曳いた男が沢山出て来るようである。頭に白布を纏って腰のあたりにいかにも暢気そうにだぶだぶしたズボンをつけたこれらの野人たちは、日の暮れた鐘路の街頭に牛と共に三々五々、売れ残った荷物を持ってあましたような顔をして佇んでいる。

けれども京城に春がおとずれ始めるのは、まず三月の半ば過ぎからであろう。そうして春を魁ける連翹や玄海躑躅が咲き始めるのは、まず四月の月上旬からであろう。この玄海躑躅は九州の一部や対馬などにはあるそうだけれども、私が見たのは朝鮮が初めてである。日本の多くの躑躅は、葉が出て後、その絢爛な花色を初夏のまばゆい日光に輝かすが、これはまた葉の出ぬうち日の光のやっとな暖かくなって来始めたところに、つつましいその紫をおびたやや薄い紅の花をつけるのである。今この大学の医学部のある所は昔の王宮の跡だと聞かすが、その構内の回春園の躑躅は、私の京城でも最も好む眺めの一つである。この殆ど人に忘れられたような庭園の、大きな黒い枝をした櫟がまだ茶色の若芽を出さず、去年の枯葉を堆く散らした下から、緑草が僅かに萌え出ようとし、松の葉はまだ黒ずんで冬のくすぶりから蘇り切らないような、春まだ浅いこの一囲いの庭へ、斜面に層々と重なって、ある所は密にある所は疎らに、それが日の光の受け方によってあるいは明るく白味をおび、あるいはくらく紫色にかげり、模様の濃淡をいうにいわれぬニュアンスとを現しているこの躑躅の花は、実際にいつまで見ても飽くということを知らない。（『朝鮮風物記』『青丘雑記』岩波書店、124～127頁）。

京城の春の風景を描いた日本人のエッセイは少なくないが、管見するところ、「朝鮮風物記」（1929年記）の冒頭にあるこの記述ほどに、京城の春の息吹を伝えてくれる記述を知らない。ここに描かれているのは安倍能成が居住する南山山麓の初春の風景であり、待ちかねたように洗濯に出かける女たちの姿が、土や木々や水の動きとともに描かれたかと思うと、それにやや遅れて「薪や松葉を積んだ牛を曳いた男」たちが登場する。後続する部分で、安倍は一年半を滞在した欧州での見聞を織り込みながら、次のような京城での発見を記している。

友達〔浅川巧〕の家で李朝の壺に投入れた初夏らしい芳烈な香のする白いリラ〔ライラック〕の花を見て、その四、五本をもらって帰って書齋に生けておいた。そのむせるような香は部屋に満ちて、一種の感情と感覚とを促さずにはおかなかった。私は数年前パリの街頭の花屋のあたりに漂っていたこの香を思い出して、ヨーロッパの春に対する回想を再び新たにした。ところがある夕方、寓居の近くを散歩して見ると、ある官舎の塀を越して一杯に白く咲いているのはやはりこの花であった。しかも山寄りの人家をずっと見渡すと、桜の散り過ぎた五月ごろの青葉の上に霰を散らしたように白いのは、

皆この花であった。そうしてその中には随分の大木さえある。

京城の春を迎えることはこれで四度であるが、京城にこの花があり、しかもこんなに沢山、それも大木までであると明らかに気づいたのは今度が始めてだ。ということは、われながら何という迂闊さであろう。けれども迂闊さはこれだけには止まなかった。帰って書斎から俯瞰すると、紫丹色と鮮緑色との二種の楓かえでの若葉の間に白い花が見える。庭に下りて側によって見ると、それは実にリラの花であった。リラの名、リラの香には私にとって前にいったごとく遠いヨーロッパ殊にパリの聯想があった。その花が今私の鼻先に咲いていたということが私にとっては一つの驚きであった。それは喜ばしいが、又少しは可笑しい驚きでもあった。

リラは昔から朝鮮にあったと聞いた。またこの白いリラは朝鮮のものではない。紫色の違った種類がそれだとも聞いた。私は知らない。

外国種の樹で京城に多いものにアカシアがある。これは京城ばかりでなく朝鮮の到る処にポプラと同じように多い。田舎の街道に虐待を忍びつつ立っている並木のアカシアはみじめだし、小川の傍などにむやみに密生している若木のやぶはうるさい感じがするが、しかし初夏の窓の辺に大きいアカシアの枝が影を作って、このごろ咲くその花が一種の甘さを持った香を送ってくれるのは中々よい。

京城は美しい都である。少なくとも自然の形から見て美しい都である。この自然の形を大いに利用する都市計画者があって、折角の自然の美観を破壊しないで、それを補長したならば、それは将来において一層美しい都となるであろう。ただ然し我々が我々の国を見る度に感ずること、景色は美しい、然し人間が多すぎること、美しい自然も多過ぎる人間の為に急速度をもって無思慮に無計画に破壊されて行くということを考えると、この京城が我々日本人の手によって果たして美しくなるかどうかを危ぶまずに居られぬ。

京城は大体三方山に囲まれて一方は即ち漢江に臨んでいる。纏まとまりがあると同時に、塞がれたという感じが無い。北漢山の巍ぎが峨たる山容はいつ見ても立派であるが、西北の方義州街道に臨む仁王山も小さいながら魁偉な形を持ち、北漢山の前に控えた三角形の白岳も一寸峻峭な形を見せて、それが東の方の駱駝山あたりから平になって、東大門のある所からやがて南山に続いている。この三方の丘陵は斜面をなして大体漢江に向かって傾いている。この斜面のために、又この斜面に割合樹木の多いために、京城の町は趣きを有している。私はこのごろ私の寓居から朝鮮神宮までの南山の下腹を縫った道を散歩して、内地よりも長い初夏の黄昏を楽しむことが多いが、この歩道から見た京城の、殊に市街は、高低参差して所々に緑樹があり、殿閣があり、会堂があり、親しく歩いては乾いて殺風景な市街も、様々な美しい陰影をつけ、趣を添えて私の前に顕れる。もしこの道を、更に西南の方龍山の方へ拵げて、漢江の眺めを十分に取り入れることが出来るようにしたならば、それは実に素晴らしい散歩道であろう。私はそういうことを考える時、緑樹の丘の間からアルノー河を眺める、イタリーなるフィレンツェのあのミケランゼロ広場へ導く散歩道を思い出さずにはいられない。また同時に東北の都仙台の景色を思い出さずにはいられない。(同書、134～137頁)

安倍の朝鮮エッセイにはしばしば、京城帝大に赴任する前に一年半滞在した欧州での

見聞が織り込まれている。それは安倍のエッセイを三角測量的な性格にするとともに、読者に朝鮮の魅力を伝える武器にもなるもので、この時代の朝鮮の魅力を伝えるに安倍ほどに貢献したものはいない。にもかかわらず、戦後の日本では安倍能成の朝鮮エッセイに対する関心は低調である。というだけではなく、それに触れるものが批判的であるのはなぜなのだろうか。そのやや古い例に、安倍の代表的朝鮮エッセイ集である『権域抄』(斎藤書店、1947年)を取り上げた、梶村秀樹(1935~1989)の例がある。

この本のなかで安倍が愛しているのは、朝鮮の風物であり、自然であり、物見遊山ものみゆさんに出かけた名所旧跡にすぎない。二〇年も朝鮮に住んだ人なのに驚くほど生身の朝鮮人との直接の接触が少ない。出てくるのは、通学の途上でのゆきずりの見聞、旅行のさいに偶然ふれた場面、それ以上ではない。彼はいつも朝鮮人を遠い距離において眺めているだけで、実際それ以上知ることにはなかったにちがいない。(略)このように典型的な都市生活者であり、生身の朝鮮人の苦しみにあえてふれようとせぬインテリの「愛」は、抽象的な風物に注がれるしかなく、センチメンタルにならざるをえなかった。あえていえば、遊び半分であり、「愛」しうる自分を愛しているにすぎなかった。当然、その忠告も、必ずしも当たっていないわけではないのに、的を射ることができなかった。(『梶村秀樹著作集 第一巻』明石書店、1992年、236~237頁。初出『地方文化の日本史 第九巻』文一総合出版、1978年)

この文に唯一同意できるところがあるとしたら、それは安倍が「生身の朝鮮人」との接触が少なかったという点であろうか。しかし、異文化交流において人間との交流を避けるというのは、今も昔も日本人に広く見てとれる行動様式であって、かくいう梶村氏にだって、その気味はなかったのだろうか。

それにしても「生身の朝鮮人」との接触が少なかったという印象を持って、「朝鮮人を遠い距離において眺めているだけで、実際それ以上知ることにはなかったにちがいない」とするのはほとんど言いがかりであって、そもそも安倍が朝鮮人に無関心な人間であったなら、京城帝大法文学部における氏の哲学講義が名講義として朝鮮人学生間にも人気を博していたことを、どのように理解することができるのだろうか(李忠雨『京城帝国大学』多樂園、1980年、172頁)。

異文化体験と当惑の体験

とはいえ、ここでは梶村に反論を加えるということをこれ以上しない。そんなことより、ここでは安倍の朝鮮エッセイについていくつかの特徴を記しておきたい。安倍の朝鮮エッセイは、第一に、その異文化体験が自文化発見に導かれるという性格のゆえに魅力的であり、その自文化発見とはなにかしらの当惑を伴いながらも安堵感に導かれる、という性格のものである。たとえば「秘苑の印象」(1936年記)にある次のような文。

朝鮮の名苑に就いて書けとの御命である。所が私が京城で見た庭園は、昌徳宮の後苑である秘苑、毎年天長節に園遊会のある景福宮の後園、それから大院君の別荘でそ

の雅号にもなっている北門に近い石坡亭、狭いけれども纏まったものとしては、大学の医学部の構内の旧苑回春園くらいなものである。(略) 総じてこれ等の庭園に通じて、日本の庭園の如く細かな人工が加えられていない。大体は自然の地形をそのままにして、そこに池を穿ち道をつけ、亭樹宮殿等を配したに過ぎず、その樹木に至っても、殆ど盆栽的な剪裁が加えられていない。またそれを普通の西洋の宮苑に比べると、全体の組織が幾何学的設計の下に出来ているということが殆どない。西洋の庭園は全体の設計が人工的であって、その細部に至っては余り人工を加えず自然に任ずるという傾向を有し、日本の庭園は自然を模するという趣旨によって、狭き地域の中に自然を盛ろうとする為に、却って非常に自然を害して箱庭的纖巧に墮する弊がないとしない。朝鮮の庭は西洋の意味においても日本の意味においても人工的要素が少なく、自然的要素が多いといえるであろう。

更に一般的にいえば、朝鮮には宮苑の外に貴族とか富豪とかの邸内にも、ほとんど庭園と称すべきものはないそうである。普通の家などでも前庭には李、連翹、それから梨等を好んで植えるそうであるが、大抵小さな樹木の多く目に遮らぬものに止まり、庭木を見て楽しむということはない。寺院なども溪流を溯った秀岳の麓の形勝の地を占めて、全体の景観はすぐれているが、その建物と建物の配置、その間における林石の按配に至っては、ほとんど考慮する所がない。けれども旅客がたとえば平壤牡丹台付近の景色において見るがごとく、その山に倚り、水に臨んだ数々の亭樹は、自然の景物の中であって、それに画面的な賦彩を与え、それらの建物が画中のものであると共に、そこからはまた画面的な景観が望まれるように出来ている。こういう点では、中国人と共に朝鮮人の方が日本人に優れているように思う。これは従来の日本人の自然に対する態度が、自然を自分の所へ請ずる傾きを有するのに対して、朝鮮人が自分を自然へ放つという傾きのある所から来ているのではないかと思う。日本で裏店に住む人が盆栽を愛玩し、普通の民家も各自分の小庭を擁し、すべての庭園が座敷に落ち着いてわがものと眺めるように出来ているのなども、その現れとってよかろう。それだけまた庭園に対する関心、一本一石を自分の好むように布置しようとする要求が、日本人には強い。朝鮮人にはそれがほとんどないように思う。この朝鮮人の生活の一面における自然的な投げやりのよさが、焼物などにも現れている。そうしてその美点を発見したのは、繊細な感覚を有する日本人であったが、しかしこの自然的な器物をも、日本人がやかましい神経質な配合関係の中に取り入れることによって、これを賞玩たのはやはり日本的趣味の現れとってよかろう。茶道が日本人の庭園趣味によきにつけ、あしきにつけ大きな影響を与えていることも、この点に関連して誰しも考えることであろう。(「秘苑の印象」『権域抄』93～96頁)

「朝鮮の庭は西洋の意味においても日本の意味においても人工的要素が少なく、自然的要素が多い」というとき、安倍の日本庭園イメージにはそれまで経験したことのない陰りの感覚が生じていたのではなかっただろうか。つまりここに記されているのは、後段で語られる「投げやりのよさ」の発見者の体験がおそらくはそうであったように、異文化体験を通しての自文化発見には何かしらの当惑の体験があり、そのことを安倍は自己分析的であると同時に率直に表明しているのである。「京城雜記」(1928年記)に記されている洗

濯の記述にも、やや似通った体験が記されているように思える。

事の序に服装のことを少しいおう。我々が朝鮮に来て強く感ずることは、内地人が足を出すということである。朝鮮人が一般に貧しい人までも脚部を出さない為に、そのコントラストが殊に著しく感ぜられる。昔のギリシャ人は知らないが、世界の文明国人で脚部を平気で出すこと日本人のごときものはあるまい。京城で最も賑やかな通りの本町を夏の夜歩いて、総ての内地人の男女が浴衣をつけ、素足を出して歩いているのを見た時、自分は内地では何とも思わなかった現象を異常な現象の如く感じた。脚の下まで包み隠した朝鮮人と並んで、九州男子の子弟らしい中学生が、初冬の頃にも足袋を穿かず、朴齒の下駄を鳴らして肩を怒らして歩くのにも、私は一種の苦笑を覚えた。正直の所、脚部を露出する風俗が上品な風俗だとはどんな国粋論者も考えまい。朝鮮人が内地人のそういう風を野蛮視するのも一概に無理とはいえない。少なくともそれは屋内の生活と屋外の生活とが画然と区別せられる、即ちそういう意味において私生活と公生活との区画を必要とする近代の都市生活と両立する風俗ではあるまい。この我々の風俗が南洋の熱地から来たかどうかは知らないが、しかしそれが上品な風俗でなくても、我々がその中に安易とくつろぎとを見出していることは事実である。風呂にはいって浴衣がけで打ち開いた二階の欄干に寄るという気持ちは、我々が最もエレメントにいる時である。又内地人の風俗がこの方向にリファインメントを加えてそこに独特な美しさを出していることも事実である。兎に角同じ支那文化の影響を多分に受けた民族でありながら、内地人と朝鮮人との風俗の差異は、この点において著しく認められる。

私にはこういう気がする。内地人の服装は暖かい土地に生まれた人間の屋内生活の為に形造られている。屋外生活に適した服装を必要とすることが少なかったことは、一面からいえば屋内と屋外との生活条件の隔離が甚だしくない、という温和な風土にもよるだろうし、又は我国の、殊に平和が続き一種の社会組織が固定した徳川時代の生活に、公的な社交的集会等の機会がなかったことに基づきもするであろう。何れにしても屋外と屋内との生活に矛盾の少ない、或いは屋内に居るものを屋外にかり出す様な春夏のころの服装としてはどうにかやって行ける内地人の服装も、冬になって来ると明らかにその欠点を見せて来る。一体に下のすぼんだ感じのする着物の上に髻の大きな頭を頂いた、マントを着た、紫色のカバーをつけて下駄をはいた日本婦人を京城の冬の街頭に見る時に、誰しもそういう感じを抱かぬものはあるまい。そこに日本現代の文化の含む複雑や混沌や矛盾が、明らかにしかも可なり醜く象徴せられていることを私は拒み得ない。

私は朝鮮の男子の服装をそう恰好がよいとも思わないが、婦人の服装は殊に戸外の服装として内地婦人の服装にまさっている様に思う。同じ釣鐘マントを着ても裳のある朝鮮婦人の恰好は遥かに内地婦人よりよい。朝鮮婦人の髪も簡素で形がよい。殊に後ろに束ねられた髪にまとった赤いリボン、色の少ない服装の中にあって極めて強いエフェクトを与える様に思う。朝鮮婦人が冬になって頭の上から首へかけてかぶる、ちょっと舞楽の烏兜の様な形をした帽子もちょっと面白い。兎に角現代内地人の服装の基礎に纏まった趣味がなく、そこに可なり迷いが多く、有機的統一のないのを見慣れた眼には、朝鮮婦人の服装の単純ながらも統一ある美しさに、一種の長所を認めざ

るを得ない。(『青丘雜記』、91～94頁)

私たちは異文化との出会いを通して異文化について多くを学ぶが、それ以上に実は自文化について多くを学ぶ。安倍の朝鮮エッセイはそのことを教えてくれる文であり、異文化論の視点は一九七〇年代以後、日本では流行になるが、異文化体験を通しての自文化の眺め直しの体験を安倍のように喚起的な言葉でパラフレーズしてくれた例は、安倍以前にも以後にも実は少ないのである。

隣国とは何か

安倍の朝鮮エッセイは、第二に、隣国との歴史・文化的関係について斬新な視点を提供してくれる。

朝鮮が文化上日本に多大の影響を与えたことは、争うべからざる事実である。隋唐時代、支那と交通して直接にその文化を伝えたこともあるが、その以前は皆朝鮮を通じてであり、その以後とても朝鮮の文化的仲介は依然として存した。百濟から応神天皇の朝に派遣された(二八五年)有名な王仁は、王氏であって、楽浪人即ち漢人であったといわれるが、推古天皇の朝には高句麗人によって文学が伝えられ、聖徳太子の師惠慈は高句麗人であった。奈良朝時代(七〇八～七八一)に於ける唐文化の輸入が高句麗、百濟等の朝鮮人の手を待つことの多かったことも否定することは出来ない。徳川時代に至って藤原惺窩に朱子学を伝えたのは、姜沆という朝鮮人であったといわれている。こういう風に昔から朝鮮は、日本へ中国文化を若しくは中国に伝わった文化を伝達し、仲介してくれたという点に於いて、日本文化の恩人であった。中国文化の為には日本がわるくなったばかりで、中国文化なんか一つも有難くないというような僻論を吐く人もあるが、日本文化が中国文化の影響なしに今日の水準に達し得なかつたろうことは、万人の認めざるを得ないことであり、我々はこの文化を伝えてくれた昔の朝鮮人に感謝してよい。

以上はただ歴史的事実の二、三の断片に過ぎないが、ここではそれを詳説しないで、日本人のこうした外国文化の受け入れかたに就いて一言したい。併しその前に一応考えて見たいのは、中国文化の受け入れかたに朝鮮の流儀があり、それが日本人の中国文化の受け入れかたに影響してはいぬかということである。この問題に就いて、我々の同僚である田中豊蔵君が、こういうことを述べたことがある。李王職博物館にも総督府博物館にも、金剛の弥勒半跏像にすばらしい傑作のあるのは周知のことである。これは三国統一以前の作であろうといわれている。かかる弥勒の半跏像は、日本にも、木像ではあるが、奈良の俗に中宮寺観音と呼ばれるもの、太秦の興隆寺にあるものの如く、実にけだかさの中に無限の慈愛を湛えた神品がある。ところが中国にはこういう半跏像があまり残っていないそうである。(略) 本国の中国に乏しく、朝鮮と日本とにこういう像の傑作が割に多く残っているという事実、こういう事実を通じて、そこに中国芸術に対する朝鮮人の選択が加えられ、その選択された中国文化が日本に伝えられた、ということが考えられはしないかというのが、田中君の仮説である。用心深い田中君は

固より定説としてそれを出したのではないが、これは朝鮮文化と日本文化との関係を考えるに当たって、示唆多き仮説であることは否定せられない。又田中君の説によると、室町時代に日本に伝えられた中国人（宋人）の画を称せられるものの中にも、段々調べて行けば朝鮮人の作が多いということである。こういう事実も亦、日本人の中国文化の受容に就いての朝鮮人の参加を語る一例に引かれ得るであろう。

一体中国の芸術は、規模が雄大で、内容が複雑で、随分意力的な感じを与えるのであるが、それはそのままでは日本人に親しみ得るものにはなり難いと考えられる。そこで朝鮮人のそれに与えた選択や、それに加えたモディフィケーションが、日本人に中国芸術又は文化を親しみ多くしたということも、考え得られはしないかと思うのである。日本人は概して朝鮮料理よりは中国料理を好むようであり、これは前掲の傾向とは反対のようである。併しそれにしても朝鮮料理が日本料理と中国料理との中間的位置にあることは、やはり三国文化の関係を語るものといえるかもしれない。

中国文化の受け入れかたに就いては、近頃の碩学だった内藤湖南氏は、奈良朝時代に日本に輸入された漢籍の目録その他から、日本人の独自の選択をそこに認めて居られるが、そういうことに就いては、私は十分な批判をなし得ない。ここに日本文化と朝鮮文化との交渉に就いて、一つの面白い実例を挙げるに止めておこう。それは日本の茶の湯に受け入れられた李朝の焼物のことである。李朝の陶器で民間の飯茶碗のような下手物^{げてももの}が、文禄慶長の役以後日本へ渡り、それが抹茶茶碗として愛用せられ、公家大名等の手に伝えられる中に、様々の由緒が付いて来て、所謂名物となり、今尚富豪の所有欲の重要な対象となっているというような現象には、その中に随分苦々しきもの、馬鹿げたものもあるが、併しこうして朝鮮人自身が、しかもその賤まれたる庶民^{いひやし}が、無意識に自然な気持ちで作った下手物の中に美しさを発見して、これを茶道という一つの独自の生活若しくは社交の形式の中に採り容れ、そういう器の隠れた美しさを発揮させたということは、日本人の癖としてそこに煩細なこせこせした味加わったという弊害は暫く措いて、兎に角にも日本人の手柄^{てま}とってよく、朝鮮の焼物は日本人の手に入って初めて、その本来の或いは本来以上の価値を発揮したとってよかろう。これは朝鮮文化に対する日本人の受け入れかたの一つの面白い実例として挙げた次第である。

（略）日本では前にいった如く、平安朝に至って遣唐使が中止され、中国文化の影響も従って減少したわけであるが、その反面において日本文化の特色が次第に発揮せられ、中国文化に対する独立性がより多く発揮せられたのに、朝鮮はその地理的政治的依存性によって、中国に対する文化的依存を余儀なくせられることが多かった。このことは、平安朝文学や鎌倉時代の彫刻等に就いて、前にちょっと説いた以上には触れない。仏教の如きも鎌倉時代以後それが日本的になると共に、単に王侯貴族の宗教でなく、民衆の宗教という方向に進められ、民衆の中に根を生やすようになった。この点も、朝鮮に於ける仏教の流布と比べて見たらば、面白かろうと思う。例えば百濟、新羅、高麗等の時代の仏教が王侯の宗教だった時、仏教と民衆との交渉はどうであったか。又李朝において仏教が表面から去った時、それは民間において如何なる勢力を維持したか等の問題は、私の知らんとして未だ知り得ざる所である。

日本と朝鮮との文化の共通点に就いて考えるのは、言語の構造の類似である。同じ

ように漢字漢語を採用し、これに配するに「てにをは」を以てする所、語の配列の順序が漢文に比べてより多く相似していること等である。我々は日鮮を比較する時、相違の方をより著しく感ずるが、併しその共通点、類似点は、我々の気づいているよりは又遙かに多きものがあるろう。

朝鮮は李朝以来所謂ハーミット・ネーション（隠者的国民）として、中国以外の国々との交通を拒み、世界の文化に対して全然門戸を鎖した。日本も徳川幕府の時代はやはり鎖国の国策をとったが、幕末の開国に次いだ明治の新政によって大いに西洋の文化を採用し、爾来七十年の間にこれを自分のものにするようになり、今や昔の文化関係を逆に、中国文化に代うるに西洋文化を以てして、これを朝鮮に伝えつつある。そうして朝鮮は日本の隣邦として、日本現代の文化とともに世界の文化を受容し、又世界の文化と交渉しているのである。一体西洋文化は東洋文化と性質を異にする中にも、日本従来の文化は、東洋文化中でも最も西洋文化と相異なるものであったが、而も東洋諸国民中率先して勇敢に坦懐に西洋文化を採り容れた為に、日本は世界文化の水準に達し、西洋文化をものにするようになった。七十余年の間苦勞して世界の文化を我がものとした日本の努力を利用して、世界の文化に接し得るのが、朝鮮人にとっての利益であり幸福であることは、否定すべからざる所である。西洋の文化にじかに接触するよりも、日本人の消化し来ったものによってこれを摂取することは、朝鮮文化の現段階において必要的にして又当然的なものである。これは何も朝鮮人中の特に優れたもの、又特別なる境遇におかれたものが、直接に西洋から学ぶのを拒むわけではなく、朝鮮文化の一般の必然的状態は即ちこうだということである。そうしてこれがやがては将来において、朝鮮人協力して世界の文化に貢献する端緒を開くものである。（『朝鮮文化門外観』『權域抄』274～281頁）

この文を読んで思い出すのは、李用熙（1917～1997）著「韓日関係の精神史的問題——辺境文化意識の葛藤について」（『新東亜』1970年8月号、李用熙著・盧在鳳編『韓民族主義』瑞文堂、1977年所収）の講演論文である。戦後ソウル大学の政治外交学科の創設に関わり、韓国国際政治学会会長を務めた李用熙は、上古から現代に至る日韓（日朝）の相手方に対する関心やイメージの変化を分析、長く「小中華」を自任し、日本を野蛮視していた韓国（朝鮮）が、日本統治期に至って「先進近代国」「伝統的蔑視」「仇敵」といった分裂的なイメージで日本を眺めるようになることを記しているが、その際、近代以前の日本が隣国の先進文化を吸収しながらも、それを中国文化の模倣であるとして韓国を軽蔑するのを忘れなかったように、日本統治期以後の韓国も日本の先進文化を熱心に吸収しながらも、それが西洋文化の模倣であるとして隣国蔑視を続けることを忘れなかったのだと言う。

李論文を私は田中明（第三章参照）の論考「ある韓国人学者の日韓関係史論」（財団法人日韓文化交流基金、1986年）で知ったのだが、今こうして安倍のエッセイに触れると、それはまるで李用熙論文の原型であったかのように思えてくる。二つの論考はいずれも日韓が今も昔もある種の愚かしさのなかに生きているのだということを記している。安倍能成はここで朝鮮人が日本文化に接することの「幸福」を記しているが、この人は朝鮮人が日韓併合のレジティマシー（正統性）を肯んずることのない人々であることも知っている

のである。

京城とアテーネ

第三に、安倍能成の朝鮮エッセイはときに壮大な三角測量的な文明論を展開してくれていて、魅力的である。濟州島をシチリア島に比した「耽羅漫筆」はその一例であるが、ここで取り上げたいのは「京城とアテーネ」(『青丘雜記』所収、初出1928年)の作品である。安倍は京城に赴任する前の一年半の間、主にフランスとドイツに滞在したが、知人に借金をしてギリシャ、イタリア、ノルウェー、スウェーデンへの旅をも経験している(『我が生い立ち』岩波書店、1966年、541頁)。

初めて京城へ来た時私はすぐ何処やら希臘のアテーネに似ているな、と思った。それから考えて見ると先ず総督府のある所がアテーネの王宮の位置に似ていて、その上に三角形をした白岳は王宮の左の方に聳えたリュカベトスの山に非常に似ている。北漢山の巍峩として変化に富んだ山容に比べては、アテーネの東を限るヒュメトス山は平凡に過ぎる嫌いがあるが、花崗岩を骨とした前者と大理石を包んだ後者とは、美しい白味のある底光りを持つ点では似ている。アクロポリスのある所は京城でいえばほぼ朝鮮神宮のそれに当るが、アクロポリスの全丘は大きき朝鮮神宮のある南山全体に及ぶべくはない。漢江の如き大河はアテーネにはないが、神宮の前から漢江を見おろした景色は、私にはアクロポリスの上からピレウス、ファレンあたりの海を望んだ記憶を呼び起こすだけの類縁はある。一体に京城の方が三方山に迫られて纏まった感じがアテーネよりも多い。が然し全く類は違っていても所々に大きな古い建物や廢墟が残っていて、それが比較的みじめな街家を見おろしている点、大通りは文明の都会らしくて裏通りなどの整わず乱雑でやりっぱなしであることなども、感じの上で両者に共通な点である。

けれども何よりも両者の共通を私に直感せしめたのは、実に澄み渡った濃青の空と乾いた白い地面とである。恐らくアテーネは京城よりも一層乾いた都会であろう。二、三月頃はアテーネの雨期だと聞いたが、然し街頭の砂塵は濛々として靴磨きの客を呼ぶ聲を埋めるような日が多かった。夏の盛りには市民は絶えず、水！ 水！ と呼ばれる位に雨に乏しい。然し京城の雨期は夏毎に漢江の水を膨らませて、江畔の龍山の住民の心胆を寒からしめて居る。けれども我々の雨の多い都、東京に比べるならば、京城も又立派に乾いた都である。ニーチェは天才の生まれた都は皆乾燥して居るといって、フィレンツェ、パリなどと一緒にアテーネをも挙げて居る。若しニーチェが妹への手紙に漏らした願いを実現して、仮に日本へ来て東京に暫くでも住んだとしたら、彼が東京の湿気を呪ったであろうことは万に一も疑いないが、然し京城を天才の都といったかどうかはまた分からない。が、天才は兎も角も凡人たる我々にとっても、乾燥した京城の空気は確かに身体と頭脳とは好適である。春なども東京の春に免れ難い、妙に憂鬱な、倦怠の気持ちがない。実にニーチェの尊敬したギリシャの哲人ヘラクレイトスが、乾いた魂でなければ万物の一体を悟り得ない、といった詞を想い起こさしめる程、京城の乾いた空気は心身に爽快である。

アテーネは熱帯に近いだけに、清爽な気持ちの点で京城に劣る様である。それは私のいつて居った二月の始めに、既に何となく暑苦しい気分を感じたのだから、間違いあるまい。岩骨の陵々と露れたアクロポリスの上り口には、万年青が沢山生えていたが、その外に私の記憶するアテーネの樹木は糸杉と橄欖〔オリーブ〕位なものである。糸杉は杉に似ているが、杉の様に湿地でなければ出来ぬことはないに見える。京城には杉は見られぬ。朝鮮で杉の見られるのは南海岸の一部分だけで、それも移植だと聞いた。京城に多いのは松である。南山は一面松に掩われている。そうしてその間に交わる潤葉樹の新緑の色の目もさめる様なフレッシュさは、頂に近い大きい櫟の木の秋の黄葉と共に私の眼を喜ばす。私の家の窓からはその中にも殊に大きいY字形の櫟が見える。これからの日毎、私はその葉の色に季節の推移を読むであろう。朝鮮には柳の大樹が多い。その淡い緑を白い砂地と鏡の様な濃青の空とに配して見るのは美しい。夏の初めには盛んに柳絮が町の中を飛ぶ。槐樹も古い建物の前などに所々あるが、その枝振りは如何にもクラシカルである。朝鮮の到る処と同じく、京城にもアカシアとポプラとは非常に多い。しかし京城には幸に大樹が多くてこのやくざな樹もさすがに立派である。夏咲くアカシアの花の香は確かに夏らしい一種の気分を誘う。京城の春を魁ける花に、連翹と躑躅とがある。躑躅は若葉に先だって開く紫がかった一重のつつましい花である。内地にはないと思った所が、去年の春に仁和寺で見たのはそれと同じものらしかった。兎に角京城は朝鮮では樹の多い所である。満洲の広野を通過して来た人には京城の緑は殊に懐かしいらしい。松の間から白い土の明るくほの光る趣きは中国あたりと同じだが、東京近くの黒い土の山に木草がもやもやと茂っているのを見て、私は近頃一種の鬱陶しさを感じずる様になったのは、やはり京城の乾いた景色になじんだせいかも知れない。

砂地という点で共通な京城とアテーネとは、その砂を押し破って流れる河流の投げやりな姿においてもまた相似ている。京城の市中を流れる河には皆石垣が出来たが、少し市外に出ると砂の上を横ざまに流れる川水は、あのソクラテスがファイドンとその河辺の木陰に語ったというイリソス河を想起せしめる。この河はあのオリムピエイオンのコリント式の円柱の遺蹟の側を無造作に流れて、そこに砂の断面層を形造っていた。アテーネの郊外は寧ろ京城の郊外よりも荒寥の感がある。京城の町端れにまだ穴居の住民がいるが、アテーネの町端れにある放羊者の小屋は、家具を側の木の枝にぶらさげて置くという程の原始ぶりを発揮して居る。最後に町はずれ近くに粗末な文化住宅が建て増されることも。京城とアテーネとの共通点の一に数えて、このよしなし言を結ぼう。(『青丘雑記』、76～78頁)

一九二六年、京城帝大に赴任した安倍は一九四〇年夏、第一高等学校長として東京に転任するまでの十五年間を、学期中は京城で過ごし、春夏冬の長期休暇には東京の家族の元に舞い戻るといふ二拠点生活を続けた。今日、ソウルの大学キャンパスには北米に家族を置いたまま学期中を韓国の大学で過ごし、長期休暇になると家族のいる北米に舞い戻るといふノマド的ライフスタイルを実践する教員が少なからずいるが、その良き先輩である安倍は「乾燥した京城の空気は確かに身体と頭脳とは好適である」と記しているのである。

朝鮮のただならぬ変化について

安倍能成の朝鮮エッセイについてはもう一つ。日本の朝鮮統治が朝鮮の人や社会や文化に与えた著しい影響について活写した人物としても記憶されてよい。月刊誌『東洋』の「併合25年周年臨時号」に寄せた論考に、次のような記述がある。

実際、内地人は色々な点において著しい影響を朝鮮人に及ぼしつつある。朝鮮の高等普通学校の生徒の服装を見ると、そこに著しく内地中学生との類似性がある。殊にそれが南部例えば釜山あたりの様に、内地人の多く、内地人との接触の著しい土地になると、風貌や態度まで内地人の特色を著しく通有して居る。内地人が朝鮮に居住するということだけによっても、朝鮮人に影響を与えていることは、明らかに看取せられるのである。

徳川時代が主として残した内地独特の風俗の多くは、朝鮮人の採用する所となっていない。例えば男女の服装について見ても、純日本の服装をするのは、内地人の店に傭われた店員、車夫、出前持ち位なものであって、朝鮮人の女中にも「きもの」を着るものは少ない。これに反して内地に輸入された西洋風の再輸入は、実にあらゆる方面に著しい。これは朝鮮に移入された文物制度が如何なるものであったかを考えれば、寧ろ当然に過ぎることである。洋服若しくは洋服類似（殊に女性の服装において）の服装の普及は最も平凡な事実であるが、月々商略的にむやみに発行せられる西洋風のメロディーを加えた歌謡曲のレコードの如きは、朝鮮青年の好んで口ずさむ所である。朝鮮人の劇団の演ずるラヂオ劇を聴いていると、詞は朝鮮語であっても、その調子は全然内地ラヂオのそれである。学問も思想も内地の容れた西洋思想を一層浅くし、粗雑にし、又その普及範囲を狭くしたものである。マルキシズムの如き思想が、その理解は別問題として、一時朝鮮青年を動かしたのは、内地と共通なものの外に、自分の民族全体を被搾取者の位置におきたがる朝鮮人の特殊な理由によるのである。

こういう朝鮮人にとって新しい風俗や思想の採用に外に、内地人の刺激によって著しく起こって来たのは、朝鮮人の民族的自覚である。しかし如何に民族的自覚を自分であり立てても、彼等は彼等の現状を誇りを以て自覚するわけには行かない。李朝の時代に比べて、彼等の置かれた文化状態は非常に向上し、世界流通の文化に接触する機会にはより多く恵まれてはいるのだけれども、それは彼等に与えられたものであって、未だ彼等の取り得たものではない。与えられたものをあまり有難いといいたがらぬ彼等の心持ちも理解出来ぬものでない。現在を肯定し得ない彼等が遡って彼等の過去の歴史にその民族としての誇りを求めようとするのは、勢いの自然である。私は近頃朝鮮文化の将来に関する朝鮮青年の文章を少し見る機会を得たが、彼等は殆ど皆現在及び李朝時代の朝鮮を否定すると共に、高麗以前の文化の盛大を賛美し、どういう根拠があるかは知らないが、奈良の法隆寺の壁画の作者まで朝鮮人だと断じている者さえあった。(略)

朝鮮支那の古書画の展覧会を朝鮮人が開催するという様なことも、やはり内地人の刺激を語る事実の一つであろう。高麗や李朝の陶器の蒐集家が朝鮮人の間に出て来たのも、内地において浮世絵の蒐集が西洋人の刺激によって盛んになったのと相似た現

象であろう。それが骨董品の市価の亢騰に促されたものであっても、やはり民族的自覚の一つの現れであり、又これを促す一つの機縁にはなるであろう。

更に注意すべきは言語の問題である。日本国語の若きゼネレーションにおける普及は、普通教育の進歩と、朝鮮人自身の知識及び生活向上の実際的必要とから、著しく拡大を見た。これは朝鮮人の幸福と進歩とを増す所のものとして、内地人が自信を以て益々努力を加えるべき事業であるが、併しそれはまた朝鮮人二千万人の母国語を亡ぼすが為になさるべきでなく、またなし得られることでもない。(略) 一方に日本国語の進入が同時に朝鮮の知識階級に朝鮮語の自覚を促し始めたこともまた勢いの自然であろう。(略) 前にいった朝鮮文化に関する文章においても、世宗の朝に出来た諺文(即ち朝鮮仮名)の文化的価値を推重するもの多かつた如き、朝鮮の知識階級における一つの動向を見るべきである。(「問題に充ちた朝鮮」『東洋』1935年2月号)

これは一九三〇年代半ばの朝鮮や朝鮮人が経験したただならぬ変化を包括的に記した文で、日本文化が広く受容される一方には、民族的自覚の高まりがあり、受容される文化とともに受容されにくい文化があることや、「朝鮮人の劇団の演ずるラヂオ劇」のように、意識されにくい形で日本化が進行する分野があることにも触れている。この意識されにくい形で日本化が進行する分野があることを指摘しているのは貴重であるが、朝鮮語の変化についての言及が十分でないのは、安倍に朝鮮語を理解する能力が欠けていたためであろうか。この時期の朝鮮語の変化については言語学者の小倉進平が次のように記している。

近時内鮮両地間の交通機関が発達したために、内地の言語・風俗・思想等の朝鮮内に流入するものが少なくない。例えば学術上の用語の如き、経済上の術語の如き、これを音読する場合には朝鮮字音を以てするけれども、造語法は全然内地のものをそのまま踏襲し、衣食住に関する材料様式の如きものもこれを内地に採れるもの少なからず。また各種の思想の時々刻々内地より移入せられることは吾人の日常実見する所である。

更にこれを内鮮間に限らず、専ら朝鮮半島内に就いて考えて見ても同様のことが言える。即ち朝鮮に鉄道・汽船・自動車等の交通機関が発達した結果として、以前には地方によって著しき懸隔を示した種々の事象が、近来に至っては互いに相接近して、その相違の程度を漸次少なからしめつつある。

先ず言語に就いてその例を挙げれば、以前にありては同一朝鮮語でも地方によって非常な相違が存していた。(略)

併しながら近來交通の発達と、教育の普及とにより、流行の中心たる京城の事物は忽ちにして地方に伝達し、言語の如きも京城語を使用することがハイカラであり、且つ実用にも適するので、人々皆京城語を標準として、これを学習する傾向を生むに至った。老人婦女の言語の如きは最も固陋のもので、これが矯正にも多大の困難を感じるのであるが、現今では普通学校に通学する児童から間接に中央の言語を聞き習う状態になっている。(略) 朝鮮語は言語の性質が然らしめる所があるかも知れぬが、国語等に比して遥かに乱雑な状態に放任せられている。随ってこれが整理にも多大の困難を

伴うのであるが、これ等は今後の学術的研究と交通機関の整備とにより、逐次その目的に近づくことを得るに至るであろう。(小倉進平「交通機関改善の言語風俗思想に及ぼしたる影響」『朝鮮』102号、1923年10月号)

ここで注目されるのは、学術的な用語も経済上の術語も朝鮮語で字音化されて、「造語法は全然内地のものをそのまま踏襲」していると記される部分で、日本語が朝鮮語にほとんど自動的に受容される様が記されている。日本統治期の朝鮮は漢字・ハングル交じり文の草創期であった。ところで、朝鮮語の近代語化における日本語の役割について語ることは、韓国においても日本においても長くタブーとされていたが、近年それを打ち破る言説が出始めているのは好ましい。南富鎮(静岡大学人文学部教授)は、次のように記している。

近代朝鮮語は日本語を合わせ鏡にして形成されてきた。言文一致の構造をはじめ、表現と文章レベル、語彙と表現の形態などの多くは日本語から借りたものである。やや語弊はあるが、現在の韓国人が使用している朝鮮語は、朝鮮王朝時代の朝鮮語とは大きく違う。どちらかといえばより日本語に近いかもしれない。近代日本語をモデルにして、翻案と翻訳、日本文をモデルにした言文一致などによって新しく作り直されたものである。近代朝鮮語と朝鮮近代文学は、近代日本語と日本近代文学に照射されることによって初めて〈近代〉を獲得することができたのである。そのような近代文学と近代語の形成過程を林和は「移植文学史」と捉え、金東仁は日本語の「一つの言葉にそれぞれ当てはまる朝鮮語を得」ていたと述懐している。(『植民地の言語空間』『文学の植民地主義』世界思想社、2006年、110頁)。

延世大学国語国文学科教授であった金哲にも、次の記述がある。

「純粹で完結した形態の韓国語」とは、他のすべての言語がそうであるように、存在しない。古代や中世の韓国語が北方の異言語との関係でそうであったように、近代の韓国語は、一九世紀から二〇世紀にかけて、やはり同じ過程を経た日本語との、このような混成を通じて成立したという事実を直視する必要がある。(金哲『植民地の腹話術師たち』平凡社、2017年、25頁、渡辺直紀訳)。

南富鎮の著書にも金哲の著書にも引用されているのは、韓国の近代文学の祖といわれる作家の一人である金東仁(1900~51)の回顧録(「文壇三〇年の足跡」)にある次の文で、「漢字・ハングル交じり文」の形成がいかにか「漢字・仮名交じり文」に依存したものであるかを教えてくれる。

小説を書くのに最初に直面し——つまり最初に苦心するのが「用語」であった。構想は日本語でやるから問題にならないが、書くのを朝鮮語でやろうとすると、小説に最も多く使用される「ナツカシク」「～ヲ感ジタ」「～ニ違ヒナカッタ」「～ヲ覚エタ」のような言葉を「懐かしく」「を感じた」「間違い(あるいは違い)なかった」「感じた(あるいは気付

いた)」などと——一つの言葉に、それに見合った朝鮮語を見つけるために多くの時間を費やしていた。そして実際に書いてみると、それらしくもあり、また少し違うようにも思え、また読んで、確かめて、他の言葉に変えてみたりと、かなり苦労した。今は言葉に「会話体」もあり、完全に朝鮮語になったが、初めて使う時はあまりに直訳のようでかなり躊躇したのである。(金哲同書、19～20頁)

おわりに

以上で連載を終えたい。すでに脱稿し、いつ刊行されてもおかしくない状態にあるからである(ただし出版社が見つからない)。本誌での連載は序に次いで、一章から四章までで構成されているが、原稿は全体では七章からなり、本誌に掲載したのはその一部で、今回記した「安倍能成の朝鮮発見」の場合は、下記「第五章 朝鮮の発見」の前半部分ということになる。参考までに目次全体を紹介すると、次のようになる。

第一章 山河の風景

谷崎潤一郎の朝鮮行／ポプラの樹／禿山の風景／安倍能成の山河論／狩野派の絵／岩山論の系譜／赴戦高原の雄大な風景／赤松こそ朝鮮の風景

第二章 街を歩き、野山を駆けめぐる

市河三喜の濟州島紀行／漢羅山登頂／黒い海の向こう海金剛を見る／野の者、坂の者／碓を打つ音／ユートピア探訪／石窟庵の小林秀雄／陶器の破片探し／洗濯する女たち／濟州島とシチリア島／四時間の散歩

第三章 幼少期の体験

京城の思い出／新馬山と旧馬山／五木寛之の朝鮮体験／森崎和江の場合／田中明が見たこと、考えたこと／売る声、買う声、罵る声／宮城道雄と朝鮮の音／夕日の丘で見た風景

第四章 朝鮮人とはだれか

平等要求が強き社会／どこに行ってもウルオイがない／農村児童の諸問題／朝鮮人は破廉恥である／娘強力／全熙容老人と私／北漢山一周／三福とその妻／『朝鮮人の思想と性格』／『長白山より見たる朝鮮及朝鮮人』／朝鮮の生活様式／朝鮮人とはだれか

第五章 朝鮮の発見

春の賛歌／異文化体験と当惑の体験／隣国とは何か／京城とアテーネ／朝鮮のただならぬ変化について／貧民窟は見晴らしのよい地にある／欧米の博物館に朝鮮を探して／白磁の美の発見／巫女の教え／李王家の財産調査／大韓医院の内科部長／異民族統治の困難／穂積真六郎の朝鮮

第六章 挾間文一と未知の世界の旅へ

京城医専にやってきた理由／辺境の地への旅／朝鮮の秋蚩／挟間文一の日記／若干の感想／ウンゲルンの存在／「安住の地を求むるユダヤ人」／「カフェー・コリブリー」／旅する科学者

第七章 こんな日本人がいた

天理教の布教／龍山で醸造業を始める／朝鮮の農業／普通学校で教えていた頃／両班部落に養鶏を勧める／共産主義運動への参加／獄中体験／長豊里炭鉱／海老名弾正の予感／ある惜別の歌／齋藤総督がダットサンでやって来る／ハンゲル入り新聞の創刊